

オプション教材レンギョウ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●こんなやり方もあります

暗唱が続けにくいときは、こんな方法もあります。（1）お母さんが読むのを聞かせてあげて親子で一緒に暗唱する、（2）子供が自分の声をICレコーダに吹き込みそれを聴く。いろいろ工夫してみてください。

1 ある書物がよい書物であるか、そうでないかを判断するために、普通私たちがやっていることは誰でも類似している。自分が比較的得意な項目、自分が体験などを総合してよく考えたこと、あるいは切実に思い患っていること、などについて、その書物がどう書いてあるかを、拾って読んでみればよい。2 よい書物であれば、きつとそういうことについて、よい記述がしてあるから、大体その箇所、書物の全体を占つてもそれほど見当が外れることはない。だが、自分の知識にも、体験にも、まったくかわりのない書物に行きあたったときは、どう判断すればよいのだろうか。3 それは、たぶん、書物に含まれている世界によって決められる。優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。その世界は書き手の持つている世界の縮尺のようなものである。4 この縮尺には書き手が通りすぎてきた「山」や「谷」や、宿泊した「土地」や、出会った人や思い患った痕跡などが、すべて豆粒のように小さくなつて籠められている。どんな拡大鏡にかけてもこの「山」や「谷」や「土地」や「人」は目には見えないかもしれない。そう、事実それは見えな

い。見えない世界が含まれているかどうかを、どうやって知ることができるのだろうか。

5 もしひとつの書物を読んで、読み手を引きずり、また休ませ、立ち止まつて空想させ、また考え込ませ、要するにここは文字のひと続きのように見えても、実は広場みたいなところだなと感じさせるものがあったら、それは小さな世界だと考えてよいのではないか。6 この小さな世界は、知識にも体験にも理念にもかかわりがない。書き手が幾度も反復して立ち止まり、また戻り、また歩き出し、そして思い患った場所なのだ。彼は、そういう小さな世界をつくり出すために、長い年月を棒にふった。7 棒にふるだけの価値があるかどうかともわからずに、どうしようもなく棒にふってしまった。そこには書き手以外の人の影も、隣人もいなかった。また、どういう道もついていかなかった。行きつ戻りつしたために、そこだけが踏み固められて広場のようになつてしまった。8 実際は広場というようなものではなく、ただの踏み溜りではないほど小さな場所、そこから先に道がついているわけでもない。たぶん、書き手ひ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

とりがやつと腰を下ろせるくらいの小さな場所にしかすぎない。9 けれどもそれは世界なのだ。そういう場所に行きあたった読み手は、ひとつひとつの言葉、何行かの文章にわからないところがあつても、書き手をつかまえたことになるのだ。

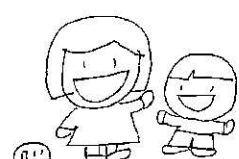
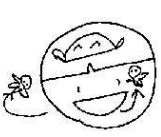
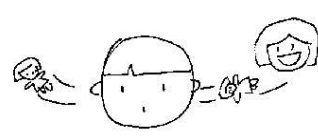
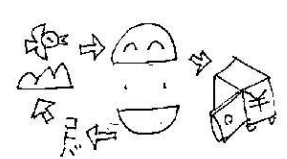
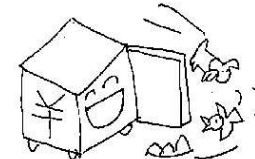
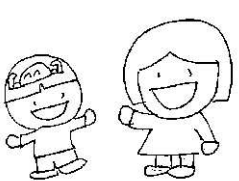
私は、なぜ文章を書くようになったかを考えてみる。0 心の中に奇怪な観念が横行してどうしようもなく持て余していた少年の晩期のころ、しゃべることがどうしても他者に通じないという感じに悩まされた。この思いは、極端になるばかりであつた。この感じは外にもあらわれるようになった。父親は、お前このごろ覇気がなくなつたと言ふようになった。過剰な観念をどう扱つてよいかわからず、しゃべることとは、自分をあらわしえないということに思い患つていたので、覇気がなくなつたのは当然であつた。われながら青年になりかかるころの素直な言動がないことを認めざるをえなかつた。今思えば、「若さ」というものは、まさしくそういうことなのだ。他者にすぐわかるように外に出せる覇気など、どうせ、たいした覇気ではない、と断言できるが、そのとき、そう言いきるだけの自信はなかつた。そうして、しゃべることへの不信から、書くことを覚えるようになった。それは同時に読むようになったことを意味している。

私の読書は、出発点で何に向かつて読んだのだろうか。たぶん自分自身を探しに出かけるというモチーフで読みはじめたのである。自分の思い患っていることを代弁してくれていて、しかも、自分の同類のようなものを探しあてたいという願望でいっぱいであつた。すると書物の中に、あるときは登場人物として、あるときは書き手として、同類がたくさんいたのである。

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

暗唱の仕方



暗唱の意義	 子「どうして、暗唱するの」 母「あーん、しよれはね」 「……」	 自分の音読した声が耳に入ると、	 脳が、「これはのどと耳の両方から来ているから大事な言葉だ」と思う。
 だから自分の言っていないことは、右から左に抜けることも多い。 母「勉強してるの？」	 同じ言葉をくりかえしている と、言葉がイメージとなって 脳の金庫に保管される。	 しかも、イメージは、いくら つめこんでも大丈夫。 「パクパク」	 母「そして、脳が丈夫になるのよ」 子「そうなのう」

●暗唱のコツ

暗唱のコツは、ただ回数をくりかえして音読することだけです。
最初は正確に読み、慣れてきたら、できるだけ早口で滑らかに音読した方が早く暗唱できるようになります。
暗唱をする時間を、朝ご飯前の10分間などと毎日ほぼ確実にできる時間帯に決めておきましょう。
暗唱は覚えることが目的ではありません。文章を自分の体の一部となるようにすることが目的です。歌を歌う練習をするつもりで暗唱していきましょう。

■暗唱すると

●1、頭がよくなる

思考力の骨組みとなる語彙や考え方が自分のものになるからです。

●2、作文がうまくなる

語彙や文のリズム感などの表現力が自分のものになるからです。

●3、勉強ができるようになる

複雑なものを覚えることが苦にならなくなるからです。

■暗唱の成果はどんなところに

●江戸時代の寺子屋教育の基本は暗唱

寺子屋教育の基本は、百字の文章を百回読むことでした。この勉強法によって日本は当時世界一の識字率を達成していました。
(江戸時代の日本の識字率70?80%、同時代のヨーロッパの先進国の識字率20~30%)

●ノーベル賞の湯川秀樹も小1から暗唱

湯川秀樹と3人の兄弟は、それぞれ5、6歳から四書五経の素読をさせられました。そして、全員が学者になりました。
そのときの勉強法は、論語を漢字のまま意味もわからないまま音読し暗唱するという方法でした。
(芳樹(兄、冶金学者、東大教授)、茂樹(兄、歴史学者、京大教授)、環樹(弟、中国文学者、京大名誉教授))
しかし、湯川秀樹は後年、素読は役に立ったが、読めないし意味も分からない文章を読むのは苦痛だったと述べています。

●暗唱を生かした著名人

暗唱を自分の実際の勉強に生かした著名人には次のような人がいます。

- 貝原益軒（1630-1714）……81歳のときに著した「和俗童子訓」で四書五経を毎日百字百回暗唱するという勉強法を提唱しました。益軒の影響は日本全国々に及び、江戸時代の日本の教育の大きな方向を決定しました。暗唱は子供だけでなく、大人にとっても価値があると述べています。
- 塙保己一（1746-1821）……盲目でありながら当時日本全国に散らばっていた600冊以上の学術書を編纂するという偉業を成し遂げました。その伝記は、ヘレン・ケラーにも大きな影響を与えました。18歳のとき般若心経を毎日100回1000日間暗唱するという誓いを立て実行しました。また、晩年まで折に触れて暗唱をしていました。
- シュリーマン（1822-1890）……独学で十ヶ国語以上をマスターしトロイアの都を発掘しました。そのときの勉強法が、外国語を辞書にも文法書にも頼らず大声で音読し暗唱するという方法でした。生まれつき弱かった記憶力が、この勉強法で改善したと述べています。
- 本多静六（1866-1952）……林学博士。暗唱の勉強法で東京農林学校（今の東大農学部）を首席で卒業しミュンヘン大学経済学博士号を取得しました。大学1年生のとき数学で赤点を取りましたが、一念発起し数学も丸ごと暗唱するという方法で学年トップになりました。子供時代、家の仕事を手伝いながら文章を暗唱するという勉強法をしていました。大学には作文の点数がよくて合格できたと述べています。
- 野口悠紀雄（1940-）……経済学者。自身の中学高校時代の経験から英語の勉強法として音読暗唱を提唱しています。高校時代、英語は教科書をただ音読するだけで好成績を維持し東大工学部に合格しました。しかし、そのように単純な方法なのに実践する人が少ないと述べています。

■暗唱の例

●長文の見本

2週の1日目30回

2週の2日目30回

2週の3日目30回

2週の4日目10回

2週の5日目10回

2週の6日目10回

2週の7日目10回

4週の1日目4回

4週の2日目4回

4週の3日目4回

4週の4日目4回

4週の5日目4回

4週の6日目4回

4週の7日目4回

読まなくてよい

暗唱用長文 きょうりゅうのたまご (小1・小2)

1週の1日目30回

1週の2日目30回

1週の3日目30回

1週の4日目10回

1週の5日目10回

1週の6日目10回

1週の7日目10回

3週の1日目30回

3週の2日目30回

3週の3日目30回

3週の4日目10回

3週の5日目10回

3週の6日目10回

3週の7日目10回

● 1 週目の読み方

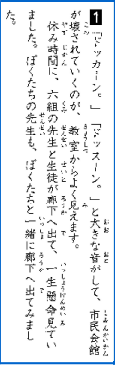
文の出だしに **1・2・3・4・5・6・7・8・9・0** という番号がふつてあります。
1 週間 7 日間、長文の暗唱をする場合、**1** が 1 日目の 1 0 0 字、**2** が 2 日目の 1 0 0 字、**3** が 3 日目の 1 0 0 字です。
そして、4 日目、5 日目、6 日目、7 日目は、**1・2・3** の 3 0 0 字を通して暗唱します。

● 2 週目、3 週目、4 週目の読み方

同じようにして、2 週目は、**4・5・6** を暗唱します。3 週目は、**7・8・9** を暗唱します。
そして、4 週目は、**1・2・3・4・5・6・7・8・9** の 9 0 0 字を通して暗唱します。**0** から先は暗唱しません。

● まず 1 週目の 1 日目

1 の 1 0 0 字を 3 0 回音読します。



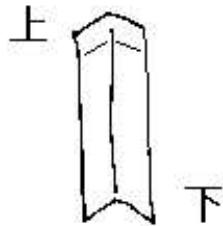
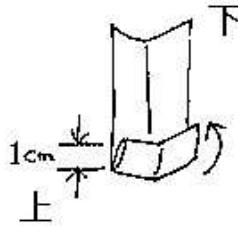
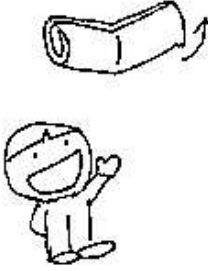
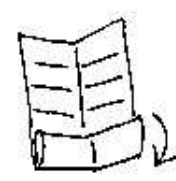
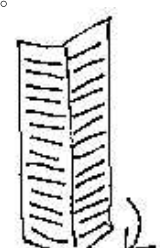
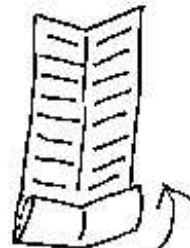
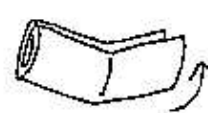
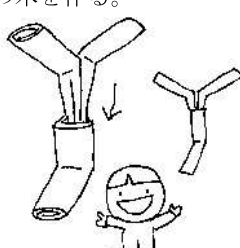
● 紙を折って数える暗唱法

紙を折って数えるお t、3 0 回の音読がやりやすくなります。
A 4 サイズの紙を次のように切ります。

1 日目	2 日目	3 日目	4 日目
			5 日目
			6 日目
			7 日目

● 30回読むとき

1日目の4分の1のサイズの紙を図のように折って、1回目の暗唱に使います。

1日目	100字の暗唱用は、長い方の紙を縦に谷折に二つに折る。そのあと上から山折りに折る。 	1センチぐらいに折っていく。 	15回ぐらいで全部折たためる。 	100字を1回読むたびに1回ずつ開いていく。 
	全部開いたら15回読んだことになる。これで約5分。 	続けて読みながら、今度は折りたたんでいく。 	全部折りたたんだら、30回読んだことになる。これで約10分。これを大枝と呼ぶ。 	3日間3本の大枝をY字型に組み合わせて暗唱の木を作る。 

● 1週目の2日目、3日目

2日目には2の長文を同じように30回音読します。3日目には3の長文を同じように30回音読します。

2そのうちに、四組の先生も生徒も出てきて、廊下の意は、人ごみでいっぱいになりました。

「クリーンカーが、太い針金のロープに大きな石を小さくけて、一回振ってから、「ドッカーン。」と、市民会館の建物にぶつける

「ガラガラガラッ。」

と、市民会館が落ちてきます。

3「ドッカーン。」「ガラガラガラッ。」「ドッカーン。」「ガラガラガラッ。」市民会館が、ぼろぼろに壊れていきます。今度は、あの大きな石を、「ドッスーン。」と、一から落としてます。すると、コンクリートのかなりが小さく砕けます。

● 1週目の4日目

4日目には、1・2・3の300字を通して10回暗唱します。

1「ドッカーン。」「ドッスーン。」大きな音かして、市民会館が壊れていくのが、教室から聞こえます。

休み時間に、六組の先生と生徒が廊下へ出て、「一生懸命見ていました。ぼくたちの先生も、ぼくたちと一緒に廊下へ出てみしました。」そのうちに、四組の先生も生徒も出てきて、廊下の意は、人ごみでいっぱいになりました。

「クリーンカーが、太い針金のロープに大きな石を小さくけて、一回振ってから、「ドッカーン。」と、市民会館の建物にぶつける

「ガラガラガラッ。」

と、市民会館が落ちてきます。

2「ドッカーン。」「ガラガラガラッ。」「ドッカーン。」「ガラガラガラッ。」市民会館が、ぼろぼろに壊れていきます。今度は、あの大きな石を、「ドッスーン。」と、一から落としてます。すると、コンクリートのかなりが小さく砕けます。

● 10 回読むとき

300字を読むときには、4日目の16分の1のサイズの紙を図のように折って数えます。

	4日目からは、300字暗唱用の小さい方の紙を折る。	1センチぐらいに折っていく。	5回ぐらいで全部折りたためる。	300字を1回読むたびに1回ずつ開いていく。
全部開いたら5回読んだことになる。これで約5分。	続けて読みながら、今度は折りたたんでいく。	全部折りたたんだら、300字を10回読んだことになる。これで約10分。これを小枝と呼ぶ。	4日間4本の小枝を、大枝の先にY字型にさす。	1週間で暗唱の木が1本できる。

● 2週目、3週目の暗唱

1週目に**1・2・3**の300字を暗唱できるようにしたあと、2週目には、同じように**4・5・6**を暗唱します。そのとき、**1・2・3**はもう暗唱しません。
3週目には、同じように**7・8・9**を暗唱します。そのとき、**1・2・3・4・5・6**はもう暗唱しません。いずれも、300字がすらすら暗唱できるようになったら、イメージ化で出だしの言葉を覚えておきましょう。

● 4週目の暗唱

4週目には、**1・2・3・4・5・6・7・8・9**の全部で900字を通して毎日4回暗唱します。
4回読むときは、指を折って数えます。
4回読んだら、暗唱の木を2本ほどきます。（そうすると、また次の月に使えます）

暗唱フォンの作り方

周囲が騒がしいときは、暗唱フォンを作って自分の声をしっかり聞きましょう。

●暗唱フォンシングル型 A4の紙を1枚用意します。	1枚を二つに折ります。	二つに折った線を基準に三つに折ります。	裏返してまた三つに折ります。
片側の端を箱を作るように折り立ててホッチキスで止めます。	両側の端を同じように止めて長い箱を作ります。	箱の真ん中あたりを折って120度ぐらいの角度にしてホッチキスで止めてできあがり。	

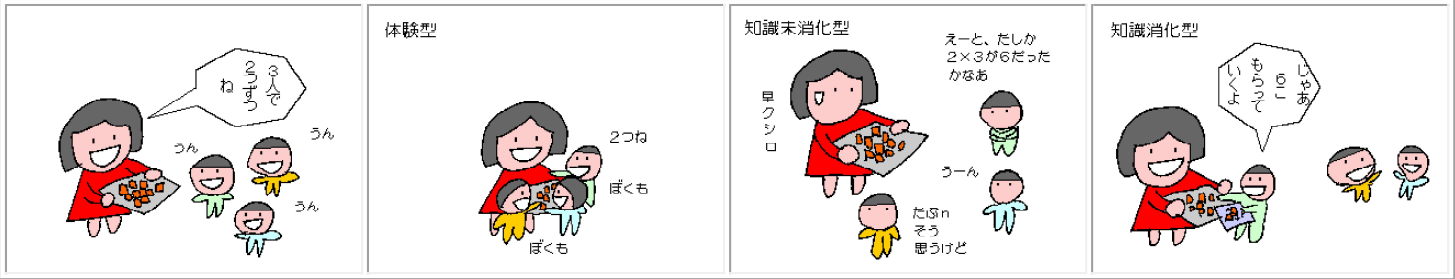
●思考力を育てる暗唱

記憶や反復や音読や暗唱が、理解や思考と相反するという考えを持つ人がいます。例えば、丸暗記という言葉には、自分で考えない、表面的な知識だけ、というニュアンスがあります。暗唱も、この丸暗記と同じようなものだと考えている人もいます。

しかし、記憶が、思考に対して弊害になるのは、その記憶が徹底していないときです。つまり生兵法の記憶、一夜漬けの記憶のときに記憶が弊害になるのです。消化され自分のものになった記憶は、思考を深める役割があります。

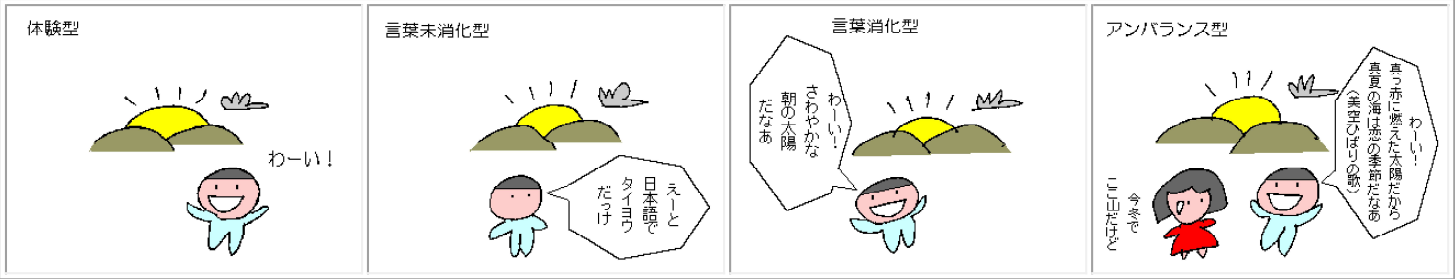
例えば、九九というものを考えてみるとわかるように、ほとんどの人は、九九を消化しているので記憶による弊害というものを感ぜません。しかし、九九を覚えていてるときは、九九を使うことによって実感よりも劣る面が出ていたこともあったのです。

お菓子を分ける （九九もうろ覚えのときは、体験のブレーキとなることがあります）



同様に、言葉も、覚えかけのときの言葉は、実感よりも劣る面があります。未消化の言葉によって、体験がかえって浅くなる時期があるのです。しかし、言葉が消化されたあとは、体験は言葉によって深くなります。

さわやかな朝 （言葉は体験の内容を豊かにしますが、体験が不足していると言葉が先行してしまうこともあります）



暗唱は、言葉による物の見方感じ方考え方を蓄積することです。

しかしもちろん、暗唱以外にも、言葉を蓄積する方法はあります。例えば、たくさん話を聞くこと、たくさん本を読むことです。多くの話を聞いたり多くの本を読んだりすることによって同じ文章に触れる機会を増やすことができます。つまり、同じ文章や同じ文脈に何度も触れることによって、理解するための言葉が表現するための言葉になっていくのです。

この表現語彙と理解語彙には、大きな違いがあります。例えば、英語を読む力を10とすると、ほとんどの人の英語を書く力は1程度のはずです。誰でも名作を読んで感動することができますが、同じような名作を書ける人はほとんどいません。理解語彙のレベルと表現語彙のレベルは大きく異なるのです。

消化された表現語彙を蓄積する方法として、日本人は暗唱というやり方があることを知っていました。九九、百人一首、いろはガルタ、素読などは、日本人が開発した教育の方法でした。

しかし、この百人一首などに見られるような記憶反復の伝統は、戦後急速に失われ、それまでの記憶や反復の学習に取って代わったものは理解と思考の教育でした。ところが、理解と思考の教育は、一斉指導と結びついていたために教える側の負担が大きく基礎学力の低下を生み出しました。その学力低下を補うものとして、公文式や百ます計算のような記憶反復の方法が登場したのです。しかし、新しい記憶反復の方法は歴史が浅かったために、その方法が万能であるかのような行き過ぎも生み出しました。

この記憶反復の方法と理解思考の方法を統合するのが、読書、作文、暗唱を結びつけた学習です。

暗唱の本当の目的は、記憶ではありません。勉強を進めるための目安として覚えることを目標にしていますが、覚えることそのものは決して重要なことではありません。記憶力を高めることや記憶量を増やすことは、暗唱の副産物にすぎません。

この記憶の副産物に関して、世間では、暗記や暗唱を役立つ知識や文化的な伝統に結びつけようとする傾向があります。例えば、「〇〇の首都は□□」というような知識を増やすような暗記や、平家物語や枕草子の一部を覚えるような暗唱です。

暗唱を表現語彙として役立てようとするのであれば、自分がこれから書く作文に結びつくような現代文の事実文、説明文、意見文を中心に暗唱していく必要があります。

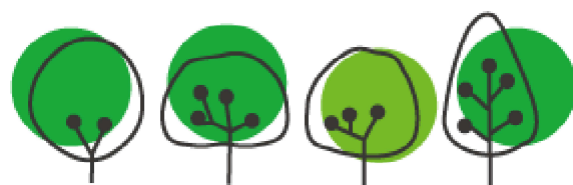
暗唱の真の目的は、反復練習によって物事を把握する力をつけることです。塙保己一が般若心経約300字を毎日100回ずつ1000日間暗唱し、しかも晩年にいたるまで折に触れて暗唱を続けたということを見てもわかるように、宗教的な面を抜きにすれば、これは決して単なる記憶の練習だったわけではありません。将来この暗唱の仕組みが脳科学的に解明されるようになると思いますが、当面は暗唱の目的は、記憶よりも理解や思考の方にあると考えておくことが大事です。事実、大人の人が暗唱を始めると、記憶力がよくなるということよりも、発想が豊かになるという感覚を持つことが多いと思います。

ただし、どの学習にもバランスは必要です。言語と経験の間にもバランスというものがあります。ルソーは、子供時代に本を読みすぎて自分が言語先行型の人間になったことへの反省から、自然教育の「エミール」を著しました。体験が伴わない時期に言語を吸収しすぎると、やはりバランスが崩れる場合があります。もちろん体験ばかり広がって言語が伴わない生活はあまり人間的とは言えませんが、言語が経験よりも大きくなることもやはり人間的な成長とは言えません。

言葉の森の暗唱の自習は1日10分程度ですから、このようなアンバランスを生み出す心配はありませんが、日常生活の心がけとして、言語的な学習と並行して家の手伝いや自然との触れ合いなど経験の時間を増やしていくことは大事です。

●暗唱に関するQ&A

- Q** 学校での音読の宿題と重なるので、子供が嫌がってしまいます。
- A** 学校の宿題は夕方の家庭学習の時間にやり、言葉の森の自習は早朝にやるようにしてください。時間が離れていれば負担に感じません。
- Q** 低学年なので、100字でも読むのにすごく時間がかかります。
- A** 時間はかかってもかまいません。気長に決めた回数だけ音読してください。
- Q** 決められた回数まで音読しても覚えられません。
- A** 覚えることが目的ではありません。決められた回数だけ音読できればそれでよしとしてください。
- Q** 「している」を「してる」などと間違っ自分なりに読んでいます。
- A** 注意のしすぎにならない程度に、ときどき正しい読み方を教えてあげてください。
- Q** 声を出さずに読んでいます。
- A** 声を出した方が頭に残りやすいと教えてあげてください。自分にだけ聞こえる小さい声でかまいません。
- Q** ふざけて早口で読んでいます。
- A** ふざけるのも早口も一向にかまいません。楽しく読んでください。
- Q** 子供にとって意味がわからない難しい言葉があります。
- A** 何度も読んでいうちに子供自身から質問が出てきますから、そのときはお父さんやお母さんが手短かに教えてあげてください。自分で辞書を引いて調べさせるという考え方もありますが、暗唱の定着を目的としているときはできるだけほかの作業はさせない方が続けやすくなります。
- Q** つっかえながら読むので、とても近くで聞いていられません。
- A** そういうときこそ、読み終えたときに、「じょうずに読めるようになってきたね」と褒めてあげてください。
- Q** 数回読むと簡単に覚えてしまうので、それ以上続けて読む気になりません。
- A** 覚えることが目的ではありません。スポーツの準備運動で行うランニングと同じものでくりかえすことで体力がついてきます。
- Q** 長いので、とても覚えられようになるという気がしません。
- A** 歌を覚えるのと同じです。かなり長い歌詞でも歌なら自然に覚えてしまいます。
- Q** 暗記よりも考える力が大事だと聞いたことがあります。
- A** 弊害があるのは、中途半端な暗記や低レベルの暗記です。本格的な暗唱は考える力を高めます。
- Q** 暗唱だけして、課題の長文の音読をしていません。
- A** できれば、毎週の課題の長文を中心に長文を1編音読し、そのあと暗唱の長文で暗唱をしてください。しかし、両方できない場合は、とりあえず暗唱だけをしっかりできるようにしてください。
- Q** 録音したものを聴く形で、暗唱の代わりになりますか。
- A** ある程度はなります。しかし、録音には機器や準備が必要ですが、音読には不要です。また、自分で声に出したものの方が定着しやすくなります。
- Q** 1日のうちに朝、昼、晩と何回も暗唱をして、先に進みたいのですが。
- A** いい心がけです。どんどんやってください。ただし、何かを新しく始めたとき子供は飛ばしすぎる傾向がありますから、親の方でコントロールしてあげてください。
- Q** 英語や社会や古文で暗唱の宿題がありますが、同じようにできますか。
- A** 同じやり方で簡単にできます。
- Q** 寝る前に覚えた方が記憶に残ると聞きました。
- A** 寝る前に覚えた方が定着します。しかし、大事なのは毎日の継続です。生活の中で毎日確保できる時間帯でやってください。その意味で朝食前の時間帯をすすめています。
- Q** 文章が長くなると、最初に覚えたものを忘れてしまいます。
- A** イメージ記憶を使えば忘れにくくなります。
- Q** 1回覚えた900字の文章は、ずっと覚えていた方がいいのですか。
- A** 自分の好きな文章であればそうしてください。しかし、普通は、次の900字の文章を覚えるときは、前の文章はもう忘れてかまいません。
- Q** 暗唱を親の私もやってみたいのですが。
- A** 大人では、更に発想が豊かになるという効果があります。しかし、子供と一緒に始めると親が先に挫折したときに説得力がなくなりますから、続けられる自信がつくまではひとりでやってください。



1どこかへ旅行がしてみたくなる。しかし別にどこというきまっ
あてがない。そういう時に旅行案内記の類をあげて見ると、あるいは
海浜、あるいは山間の湖水、あるいは温泉といったように、行くべき
所がさまざま有りすぎるほどある。2そこでまずかりに温泉なら温泉
ときめて、温泉の部を少し詳しく見て行くと、各温泉の水質や効能、
周囲の形勝名所旧跡などのだいたいがざっとわかる。しかしもう少し
詳しく具体的な事が知りたくなって、今度は温泉専門の案内書を
探し出して読んでみる。3そうするとまずぼんやりとおおよその見当
がついて来るが、いくら詳細な案内記を丁寧に読んでみたところで、
結局ほんとうのところは自分で行つて見なければわかるはずはない。
もしもそれがわかるようならば、うちで書物だけ読んでいればわざわざ
出かける必要はないと言つてもいい。4次には念のためにいろいろ
の人の話を聞いてみても、人によつてかなり言う事がちがつていて、
だれのオーソリテイを信じていいかわからなくなつてしまふ。それで
さんざんに調べた最後にはつまりいいかげんに、賽でも投げると同じ
ような偶然な機縁によつて目的の地をどうにかきめるほかはない。
5こういうやり方は言わばアカデミックなオーソドックスなやり方
であると言われる。これは多くの人々にとつて最も安全な方法であつ
て、こうすればめつたに大きな失望やとんでもない違算を生ずる心配
が少くない。6そして主要な名所旧跡をうっかり見落とす氣づかいも
ない。
しかしこれとちがつたやり方でもないではない。たとえば旅行がした
くなると同時に最初から賽をふつて行く所をきめてしまふ。あるいは
偶然に読んだ詩編か小説かの中である感興に打たれたような場所に決
めてしまふ。7そして案内記などにはとんでかまわないで飛び出し
て行く。そして自分の足と目で自由に氣に向くままに歩き回り見て
回る。この方法はとかくいろいろな失策や困難をひき起こしやすい。
またいわゆる名所旧跡などのすぐ前を通りながら知らずに見のがして
しまつたりするのは有りがちな事である。8これは危険の多いヘテロ
ドックスのやり方である。これはうっかり一般の人にすすめる事ので
きかねるやり方である。これはうっかり一般の人にすすめる事ので
しかし前の安全な方法にも短所はある。読んだ案内書や聞いた人

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

の話が、いつまでも頭の中に巣をくつていて、それが自分の目を隠し
耳をおおう。9それがためにせつかくわざわざ出かけて来た自分自身
は言わば行李の中にでも押しこめられたような形になり、結局案内記
や話した人が湯にはいつたり見物したり享樂したりすると同じような
事になる、こういうふうになりたがるおそれがある。10もちろんこれ
は案内書や教えた人の罪ではない。
しかしそれでも結構であるという人がずいぶんある。そういう人は
もちろんそれでよい。
しかしそれではわざわざ出て来たかきがないと考える人もある。曲
がりなりにも自分の目で見て自分の足で踏んで、その見る景色踏む
大地と自分が直接にびつたり触れ合う時にのみ感じ得られる鋭い感
覚を味わわなければなんにもならないという人がある。こういう人は
とかくに案内書や人の話を無視し、あるいはわざと避けたがる。便利
と安全を買うために自分を売る事を恐れるからである。こういう変
り者はどうかすると万人の見るものを見落としがちである代わりに、
いかなる案内記にもかいてないいいものを掘り出す機会がある。

(寺田寅彦「案内者」より)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 先進国の後を追いかける途上国経済と、世界の先頭を走る先進国経済のもっとも重要な差は何かというところ、「途上国経済では物まねができたけれども、先進国経済では自分で新しい知識を創造しない」とそれ以上の発展ができない」ということである。**2** 途上国の有利な点は、第一に、先進国モデルが存在し、容易に産業化のための目標がみいだせること、第二に、先進国から技術を導入できること、そして第三に、賃金など全体的なコストが先進国に比べて有利であることなどである。

3 このような有利性が存在しているかぎり、自らオリジナルな技術や知識を創造する必要性はそれほど高くない。先進国から使える技術を輸入し、それに安い賃金の勤勉な労働力を張り付けるだけで競争力を身につけることはできるだろう。**4** もっとも、これとてどこの国にでもできるほど簡単なことではないが、日本や現在急成長中の東アジア諸国はいずれもこのシナリオで成功してきた。

しかし、日本についていえば、これらの好条件はすべて消滅したといつてよいだろう。**5** 十年ほど前に、日本経済は歴史的なコスト条件の逆転を経験した。またインプット拡大による成長にも人口の高齢化、労働力人口の減少、貯蓄率の低下などの理由から多くを期待することはできない。**6** その結果、日本は先進国の宿命すなわち自らの行く先を自らの創意工夫で切り開かなければならないという宿命を、好むと好まざるとにかかわらず背負うことになったのである。

7 日本の社会経済体制は、欧米に追いつき、追い越すという明治以来の国策にそって形成されてきた。たとえば、日本の教育制度は欧米の先進的知識を詰め込むことを目指して発達してきた。これはすばらしい戦略であった。**8** 欧米と日本の間に、科学技術や近代思想などの点で大きな知識のギャップがあったのだから、まずはこのギャップを一刻も早く埋めることが必要であったし、そうすることがキヤッチアップを効率的に進める唯一の方法であった。

9 しかし、日本がキヤッチアップを終えた今となつては話は変わってくる。外来の知識を学ぶだけでは必ずしも独創的な知識は生まれない。日本の学校教育（とくに義務教育）はすばらしいという説があるが、それは少なくとも今日の観点からはとてもない誤解である。**0** たしかに、先進国に追いつく目的のために、先生が生徒に

知識の押し売り、詰め込みを強要することは理にかなつていたかもしれない。いや、欧米との巨大な知識ギャップを一刻も早く埋めるためには、大車輪で知識の吸収に努めなければならぬことは当然であった。知識吸収を急ぐあまり、時に青年たちの独創性、オリジナルなものへの考え方を育成するもうひとつの教育の重要な役割が多少なおざりにされたとしても、それはある意味ではやむをえなかったことといえるかもしれない。

しかし、今日のように、自ら価値を創造することが要求される時代になつても、教育システムが本質的な意味で何も変わっていないとすればそれは大きな問題であろう。最近の教育改革論議は当然のことながらこのような観点からなされることが多い。しかし、教育の現場では、相変わらず先生が大教室で黒板に知識を羅列し、日本的な意味での「優秀な」生徒は、試験のときにそれを正確に再現することを要求されている。生徒の能力差や、興味の所在などは無視し、とにかく上から与えられた課題を、先生が決めたスピードでこなしていくことが「優秀な」生徒の絶対的条件である。極度に一律化された教育風景である。

日本の教育現場で自分の頭で考えた独自の意見を前面に押し出すことが高得点につながるという話はおよそ聞いた試しがない。試験では先生が正解と認定する答を書くことが得策であつて、先生の頭になつたようなユニークな答を尊重する風潮はない。生徒は一定の枠のなかで発想する習慣をたちまち身につけてしまう。このように「優秀な」生徒はいくつかの入試を経て、完璧なまでに「知識吸収型」の枠にはまつた答しかできない受動的人間になつてしまう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34